

てまへんが、所謂御三家紀州、尾州、水戸家だけか（テンカトツタ）お太鼓が、ドロン……テンカトツタ……ドロン……此の太鼓の切れでお船が波を切つてチャウ〜〜と出ます。お船の中には其の頃の能役者、猿若衆と云ふ様な人が「ヤ、ヤア、ヤハヲ」と小鼓から太鼓を採りまして（ボン、カチ）打つ音横笛の音なんとも云へん好い氣持で御座ります。さて難なく御船は笹ヶ島へ到着致しました。笹ヶ島には先陣、二陣、三陣、四陣、五陣、御本陣と御座ります。御殿様は御本陣へお這入りになりました。御近衆の御方々もそれ〜〜這入つて仕舞ました。暫くの間戦争同様の事を致しますので糧食をあてがはねばなりません。御休息の間に糧食が渡りましたが昔も今も異りは御座りません。實に粗末な物で握り飯、梅干の皮包み之れは態と粗食にして御座ります。時刻が参りますと拍子木を持ちまして、御狩の刻限。御狩の用意と木を打つて廻ります。するとお太鼓がドン〜と鳴りますと五十人、割竹を持ちまして狩場、狩場を狩出せ〜、アリア〜……（鳴物打込）御家來衆は乗馬で彼方此方と馳け廻ります。

「ヤア、其處へ御越しに成つたは山阪轉太氏では御座らんか。」

「コレハ〜、犬糞ふん太兵衛殿御貴殿は何か射取りめされたか。」

「某は熊を一疋射取りました。」

「それは御手柄〜一度御見せ下され。」

「是れで御座る。」

「是は兎では御座らんか。」

「左様毛色が熊に似て御座る。」

「御冗談ばつかし、後刻御目に掛ります。」

ア、リヤ〜と狩出しましたが其日に限つて獲物が一疋も出ませんお殿様御立腹で

「予が狩鞍を催すに獲物一疋出でござるは予が武勇薄きに似たり、鐵砲上げ、引金上げよ。」とおつしやる仕方が御座居ませぬ。之は御殿様が御無理で御座ります。

「引揚げ……」

と御立腹の折柄今迄平穩であつたのに俄に乾の隅より針で突いた様な黒雲が出たかと思ふと空一面に墨を流した如く眞暗と成つたと思ふ中に、雹かと思ふ様な大雨が降り出しました。其中にピカリ、と光りますと震動雷電まじき暴風雨で御座ります。御殿様もや大聲を上げて

「予が狩鞍を催すに雷雨とは何事ぞ、天の妖氣を沈むるは、地の陽氣を以つて防がんとある。天に向つて砲發に及べ。」

「お鐵砲方〜天に向つて砲發するんだすと、これが眞實のてんでつぼうか。」

五十挺ばかり鐵砲の火蓋を切つて打ち上げましたが、お殿様の御感光と云ふ物は剛い物で今迄甚い暴